名古屋柳城短期大学
ちゃぺるにゅーす
第7号
2003年10月1日

出発点としての愛

菅原　裕治
本学教員・チャプレン

「なぜなら、あなたがたは、自由のために神に呼び集められたのです。兄弟たちよ、その自由をただ肉のための出発点としないで、愛を通して互いに仕え合いなさい」（私訳）。これは、使徒パウロがガラテヤ地方（現トルコの中央部分）のキリスト者に向けて書いた「ガラテヤの信徒への手紙」第５章13節です。ここに本学の建学の精神の源泉があります。

パウロは、この手紙の中でイエス・キリストによって、あらゆる不当な差別が消滅したことを力説しています。人間は、何かを認識するために、また自己を確認し確立するために、男女、貧富、地位、能力、文化、民族性の差など、様々な区分を用います。これらは単なる区分に止まらず、他者を差別する根拠となり、差別するもの・されるもの両者の生き方・考え方を束縛します。パウロは、イエス・キリストを信じることによって、人間がそのような束縛の状態から自由になったと確信しています。

これらのことから、パウロは、イエス・キリストによってもたらされた自由を、何のための出発点とするかを問題とします。すなわち従来の願望や欲望を実現するための機会ではなく、自分たちを自由にしたイエス・キリストの愛を通して、その愛の具体化を目指して、互いに仕え合うことを勧めているのです。仕えるという動詞は、直訳すれば「奴隷となる」ことです。それ故、「互いに」という言葉が欠けてしまっては、大きく意味が変わってしまいます。誰かが主人で誰かが奴隷であるという今までの状態ではなく、みんなが奴隷であると同時に、みんなが主人であるという新しい状態となることを語っているからです。これらから分かるように、パウロは、単に「愛をもって仕えよ」と誰かに一方的に命じているのではなく、多くの人々に愛を通した相互性と平等性の上に成り立つ人間関係を求めているのです。

このパウロの主張は、教育、保育、誰かを愛することなどあらゆる人間関係にとって重要です。何かを教えるとは、上から下へとモノを投げるように何かを伝える行為でも、誰かから何かを一方的に引き出す行為でもなく、その現象に関わる者が互いに何かを学ぶ機会、共に育つ機会だからです。親子関係で言うならば、親は、単に親として独立して存在するのではなく、子どもが誕生して初めて親として存在し、また子どもと共に親として成長していくのです。このような関係を可能にし、成熟させていく根拠と源泉が愛です。

愛という言葉は、甘美で魅力的な響きがあります。しかし、それは、相互性と平等性の上に成り立つ具体的な行為を伴わなければ、空しいものです。イエス・キリストの生涯と十字架という具体的な姿は、それを理解するための大切な出発点です。この出発点から本学は誕生しました。そして多くの子どもたちと共に様々な事柄を学んで来たと思います。教育・保育・介護に関わる者として、子どもたちと共に他者と共に具体的に何を学ぶのか、建学の精神は、今もそれを私たちに求めています。

水曜日の礼拝から

5月14日

Chance・and・Challenge

本学教員
三好　禎之

N大学および付属専門学校において主に点字を教えられていたT先生の歩みをお話したいと思います。

T先生は生まれながらにして重度の視力障害を持っています。少年時代のころを振り返ると、なぜ、自分だけ目が見えないのか、どうして、みんなの通う学校に通えないのかと、怒りの矛先をご両親に向けていたとのことです。そのころどうしようもない苛立ちと将来についての不安が大きかったと言います。

ある日、ご両親に大好きだったビートルズのレコードを買って貰って、毎日のようにそのレコードを聞いていたそうです。「こんなに英語が話せるといいなあ」とかすかに自分の将来の姿を描いていたといいます。

ある日、アメリカ人の牧師と出会い、毎週土曜日に教会で英会話を習うようになったそうです。教会へ通うようになって18歳を迎えたとき、牧師に将来のことについて尋ねられ、答えられずにいると、「アメリカで勉強してみないか」との問いかけがあったといいます。すぐにでも返事をして、行かせて欲しいと伝えたかったそうですが、家にお金がなくて行けませんと答えるしかなかったそうです。アメリカという異国の地での自分自身の姿を思い描き、胸高まると同時に、貧困という現実が重くのしかかったといいます。教会へも徐々に足が遠のき、英語の勉強も避けていると、牧師が先生の家に訪れ、「向こうの大学で勉強してきなさい」とつげられ、アメリカへの片道分の切符を手渡してくれたそうです。T先生は、切符を頂くことを躊躇していると、牧師は「多くの人があなたを支えてくれている。みんな、あなたが成功することを願っている。失敗してもかまわない。失敗した時またそこから考えればいい。大切ことは、今という時をどうあなたが生きたいかだ。そして、与えられたチャンスにチャレンジしていくことではないか。あなたの可能性をもっともっと信じなさい。」と話されたそうです。

その後片道分の切符を持って、T先生にとって希望の地であるアメリカへと渡り、奨学金をもらいながら大学に通ったとのことです。アメリカでの生活は、沢山の人種そして障害を持つ人々が、あたりまえのように社会で暮らしていることに驚いたといいます。そしてなによりも、チャンスを自分自身でつくり、チャレンジしていく人々の力強い姿に感銘したといます。

T先生のこうしたお話を考えると、私達に３つの視点を投げ掛けているように思います。それは、まず、継続性という視点です。途中で投げたしたりしないで、継続的に一つのことがらをやり続けていくと、希望の光が見えてくるということです。自分にあったペースで行えば、きっと夢叶うということです。第二に、私達のまわりには、沢山のチャンスがあるということです。それらに対して、失敗を恐れず果敢に挑戦していくことによって、自分自身がよく見えてきたり、また新たな発見があったりするということです。まず自分自身の可能性を信じるということです。そして第三に、私達は一人で生きているのではないということです。私達は沢山の人に支えられながら生きています。そんな支えられる自分自身も、誰かをどこかで支えています。すなわち、私達の住む社会というのは、共に生きる、共生の社会であるということです。T先生が語るChance・and・Challengeということは、こうした三つの視点を私達に投げかけ、大いなる希望と勇気を与えて下さる言葉であるように私は思うのです。

5月21日

サーヴァントリーダーシップ

名古屋柳城短期大学附属
三好丘聖マーガレット幼稚園
園長　小松　伯子

さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「私があなたがたにしたことが分かるか。あなたがたは、私を『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。私はそうである。ところで、主であり、師である私があなた方の足を洗ったのだから、あなた方も互いに足を洗い合わなければならない。(「ヨハネによる福音書」第13章12節～14節)

私は柳城短大第６回卒業生で、当時の柳城は全国で１番小さいカレッジでした。ちなみに人数は全校で50人位、学長はホーキンズ先生、祈りの人でした。１級上のクラスに現柳城豊田の関園長先生が居られました。神奈川は箱根外輪山の麓、足柄平野に住む私がどうして遠い名古屋の地にお世話になることになったか、それは神様の不思議なご縁だと感謝と共に思い起こしております。「トップって足を洗う人だよね。今まで違うみたい」とその園長が呟いていました。私は私立幼稚園９年を経て公立に27年という人生働くことを選択してしまった教師の一人で、今思い返すと、家庭にも子供にも犠牲を強いる事ばかりだったと思いますがよくぞ健康にここまで来られたものと感無量です。長く働かせて頂いた目で幼稚園を見ると、柳城の事というのではなく全体として女性の多い職場のせいか保守的傾向が強く、人間関係がスムースでない例が結構あり、独特の雰囲気が育ち安いように思います。

さて、標題ですが、あるキリスト教系の企業が会社倒産の憂き目に合い、会社を立て直すためには、人材の育成以外にないと着目し、社長さんがメンバーを支える、(図式するなら逆三角形の形で、トップは１番下から皆を支える）そういう体制に変えた所ぐんぐん業績が上がり、優良企業にまで成長したという体験談を聞きました。今、保育雑誌などを見ても、トップがメンバーを支える（丁度イエス様が弟子たちの足を洗われたように）という事は目新しい事でなく保育者がお互いこの姿勢で子どもを受け入れ、保護者をも支援していく姿勢が奉仕者としてのリーダーシップを果たすことではないかと思われます。キリスト教保育は昔からそうであったとご指摘を頂くかも知れません。確かに謙遜と愛に満ちた所ではありました。しかし、水よどみ、活性化の要因が乏しいと思わぬ歪みが生じないとは言えません。職員が著しく交代する園も残念な事として受け止めています。個人の持つ信仰や理念がそれぞれの場で生かされ、価値観の違いが排除につながらないように私は望みます。

現職の先生は保育に情熱を傾ける程、仕事は際限なく増すので、何を優先するかその順位をチームワークでしっかり押さえる事が大事です。豊かな保育をするためには人間として自分の時間を持つことも重要なことです。「旅をした人は多くのことを知り、経験の豊かな人は知識を持って語る。経験のない人は、僅かな事しか知らない。しかし旅をした人は賢さを増す」(「シラ書」第34章９～11節旅の掟)。

人生の旅のことでしょうか。保育者が心から楽しんで保育ができるような環境でありたいし、それを支えてあげたいものです。

7月2日

共に生き、共に学ぶ

古橋よしえ
(1997年卒業生)

私にはダウン症という障害を持った、今年18才の娘がいます。ダウン症児は、統計的には1,000人に一人の割合で生まれてきます。この娘との関わりが私の人生を変えました。私の最初の試練は、娘の２年間にわたる入院生活でした。ダウン症の合併症からきた心臓病で８時間にわたる手術を受けました。大学病院の小児科に入っていましたから、比較的症状の重い子ばかりでした。だから、病室は雰囲気が暗いとみなさんは想像されるかもしれませんが、事実は全く逆で底抜けに明るい人たちの集団でした。なぜかと言うと、心の葛藤を経て最悪のシナリオを乗り越え、最後に自分の子をガッチリと受け止めているからです。言いかえれば、子どもへの愛が病気に勝った瞬間でもあります。

この時の入院生活の経験と人々との出会いから、娘との人生を実り多くするために、保育の専門知識を習得したいと思うようになりました。障害児教育を目指して柳城へ社会人入学をいたしました。

柳城の２年間は未熟ながら、児童福祉から実習まで、多様な角度から学ぶことができました。先生方のご指導は、有形無形に私の中に蓄積されました。そして、礼拝の時間は私が自分自身と向き合える大変貴重なひとときでした。イエス様の教えにより、自我のためだけでなく、他の人のためにも祈ることができるようになりました。

また、実習を通じて、実習先の子どもたちの支えと期待を強く感じました。肉親をはじめ幾多の別れというつらい経験を経た、この子たちの応援に応えるためにも、自分自身を高め子供たちに恥じない保育者になる努力をしなければいけないと感じました。

私は柳城の建学精神「愛をもって仕えよ」が保育の真の姿を物語っていることを学びました。この言葉が私と娘との二人三脚の人生のバックボーンにもなりました。

娘は来年養護学校を卒業いたします。これからは荒波も寒い日もある社会生活が始まります。学校で学んだように子どもたちの成長には人との交わりが非常に重要です。孤独なさびしい人生を送らせることだけは絶対に避けたいと思っています。みんなが集まる場所がほしいと、障害児の親たちで小規模作業所準備会を６年前に旗あげしました。会の名前は「ひだまりの里」と言います。私たちは障害者と健常者が共に手を取り合う社会を目指しています。誰にでも開放された、地域のコミュニティになれる施設づくりを進めていこうと確認し合いました。ネーミングの「ひだまり」は柳城の講師、故石田先生につけていただきました。縁側でポカポカと日向ぼっこをしている、そこに人がつどい、のんびりとお話をする世界、そんなスローライフのイメージです。

そして、念願の共同作業所を昨年３月に立ち上げました。「ひだまりの里」は収益事業として「珈琲ひだまり」という喫茶店を営業しています。障害者が作る誰にもやさしいお店です。福祉と事業のバランス、障害者と健常者の関わり方など困難な課題ばかりです。更に社会福祉法人化、グループホーム事業を将来の課題として持っています。私はそんな忙しさの中に充実した人生をしみじみと感じています。

最後に、ダウン症の子は昔から「神様の子」と言われています。私たち夫婦を娘の両親として選んでくださった神様に感謝して、地域の中で娘と手を取り合って、共に生き共に学んでいく人生を歩みつづけたいと考えています。

キリスト教Q＆A

聖職候補生

名古屋聖マタイ教会勤務
ダビデ市原信太郎

Q．礼拝って何ですか。どうして礼拝するんですか。

A．高校時代までキリスト教に縁のなかった方々は、柳城の入学式が礼拝として行われることに新鮮な驚きをもたれたかも知れません。短大では週１回チャペルで礼拝がありますし、附属幼稚園でも子供達と先生達が共に礼拝する時間が大切にされています。このことに象徴されるように、礼拝を共に捧げるということは柳城の生活の重要な一部分です。それだけに、この質問はなかなか本質的で答えにくいものがありますので、「礼拝」という言葉の意味を手がかりに考えてみたいと思います。

まず、日本語の「礼拝」は、他の宗教では「らいはい」とも読みます。「礼(禮)」は、もともと祭礼の器に供え物が盛ってある「豊」と、神を表わす「示」との合字で、「神に供え物を捧げて敬意を示す」というのがもともとの意味でした。やがて、「神に仕え神を祭ることが人の行うべきことである」というところから、「守るべき儀法・作法」「敬う」という意味が出てきました。「拝」は、手を組んで頭を下げておがむというところから生じた字で、「礼法にならって拝する」という意味があります。

英語では、「礼拝」にあたる言葉はservice, worship, liturgyと３つあり、それぞれに異なる強調点を持っています。service（サーヴィス)は、「仕える」という意味で（日本語でもよく使う言葉になっていますね)、「神に仕える」ということから礼拝、ことに公の礼拝という意味に用いられるようになりました。worship（ワーシップ)は、語源的にはworth（価値)という言葉から来ており、「価値あるものに栄光を帰すること」というのが元の意味です。最後の言葉はliturgy（リタジー）で、これはギリシャ語の λειτουργία（レイトゥルギア)が語源ですが、この語は λαός（ラオス）「民」と ἔργον（エルゴン）「業」の合成語です。もともと「個人が負担する公共の務め」を意味していたこの言葉は、旧約聖書がギリシャ語に翻訳されたときに、「皆で捧げる」というところから「礼拝」の意味で用いられるようになりました。

さて、これらの言葉の意味をまとめてみると、礼拝にとって大切なものが何であるかが見えてくるように思います。すなわち、「礼拝」とは、「ある形式に従って」、「神に奉仕の業を捧げ」、「神のすばらしさを知り、それをたたえる」、それを「皆で行う」ということです。

この中で、キリスト教礼拝にとって特に大切なことは、liturgyの意味が示すとおり、「皆で共に行う」ものであるということです。一人で静かに心の中で祈ることも大切な祈りの形ですが、「礼拝」を捧げるときには「皆で共に祈る」ということに大きな強調点があります。イエスは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタ18:20)と言われました。「皆で共に」神に向かい合い、祈るということは、一人一人の思いを越えたダイナミックな経験です。それは、ここに集まっているわたしたちの間におられる神と出会うという体験です。

この、「皆で共に祈る」ということは、ある点で特別な「技術」を必要とします。技術と言っても難しいことではありませんが、それぞれが個性を持つ数百人が一つの場所で「共に祈る」ということは、何の工夫もなしにできることではありません。礼拝が決まった形式に従って行われるのは、一つはこのためです。形式そのものにも意味はありますが、より大切なことは、それによって「共に祈る」という出来事が作り出されるということです。

ですから、（授業中でもいつでもそうですが、特に）礼拝中の私語は許されません。私語は、「神のすばらしさをたたえる」のと正反対の態度だというだけでなく、「皆で共に」という礼拝の大切な部分を失わせることになるからです。また、礼拝の中で聖歌を共に歌うことも、「共に祈る」という出来事を作り出す上で欠かせないものです。

そして何より、「共に祈る」ためには、皆が集まらなければなりません。別の言い方をすれば、「神によって集められたわたしたち」が祈るということが、「礼拝する」ということです。今日チャペルに足を運ぶ、あるいは勤務先・実習先である幼稚園や保育園に出かける、という出来事なしには、「共に祈る」ことはできないのです。普段は違う場所に住み、さまざまな違いを持って生活している一人一人が、礼拝を捧げるために集まること自体が、すでに素晴らしい出来事の始まりなのです。ですから、礼拝の時にあなたの隣にいる人は、「神がわたしたちを集めてくださった」ということのしるしにほかなりませんし、あなたが礼拝に参加するのを、みんなが、そして神様が待っているのです。

では、チャペルでお会いしましょう！

おしらせ

2002年度私立大学経常費補助金特別補助「特色ある教育研究の推進」事業として、「建学の精神『愛をもって仕えよ』に基づく豊かな人間形成」を主題に、以下の取り組みを致しましたので、ここに報告させていただきます。

大学礼拝は、学期中に毎週水曜日２回行なっており、授業科目「キリスト教概論」とあわせて本学のキリスト教教育の中心である。これに関する取り組みとして、「式文・さんび歌集」の作成がある。式文に関して以前より現代の学生に合わせた新しい式文作成が望まれていたが、今回、式文を学生が礼拝以外の場においても用いることを目指し、全体を見直し改訂した。聖歌に関して、従来は歌詞が文語である『古今聖歌集』を用いていたが、現代語の新しい曲を選択し、文語の聖歌を残しつつ、式文と統合して、「式文・さんび歌集」を作成した。また従来学生が参加形態が受動的であったため、学生の主体的に参加を目指し、学生用に礼拝で用いる正式の衣服を作成し、学生補助の役割を設けた。

合同礼拝は、毎年前期の最後に行なわれる全学的礼拝である。今回は、特に豊かな人間形成のために必要な人権に対する理解を深めるため、日本聖公会九州教区執事太田国男氏（愛知県出身元ハンセン病者）を招き、「呪縛からの解放　ハンセン病者・元ハンセン病者の人権回復をめざして」と題して、人権に関する講演会として開催した。これに先立ち、ハンセン病に関するパネル展（2002年７月11日から19日）を本学内で開催し、学生にハンセン病また人権に関する知識と認識を深める機会を提供することができた。

その他、12月に行なっている全学参加のクリスマス礼拝で行なわれる学生有志による聖誕劇では、劇によりふさわしい衣装や道具を作成し、充実を図った。

後期の礼拝のお話担当者は次の通りです。

9/24 菅原チャプレン	10/1 塚田局長
10/8 菅原チャプレン	10/15 渥美純一朗（保育専攻1年生）
10/22 季智子（保育科2年生）	10/29 合同礼拝
11/5 卒業生	11/12 菅原チャプレン
11/19 菅原チャプレン	11/26 成田教授
12/3 菅原チャプレン	12/10 野々垣教授
12/17 クリスマス礼拝	1/7 菅原チャプレン
1/14 田浦学長	

2003年10月１日発行　第７号
発行所　名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼発行者　名古屋柳城短期大学 宗教委員会
印刷所　株式会社　丸和印刷

この印刷物は再生紙を使用しています。